光仁・桓武朝の瓦生産について

長岡宮式軒瓦を中心として

中島信親

Tile Production during the Konin and Kammu Eras : A Study of the Nagaoka Palace Style of Roof Tile

NAKAJIMA Nobuchika

はじめに
❶奈良時代末～平安時代初期の軒瓦の様相について
❷長岡宮式軒瓦の文様・造瓦技法と生産
おわりに―瓦からみた長岡京造営―

[論文要旨]

本論は、光仁・桓武朝にあたる奈良時代後半から平安時代初期に都城や国家が造営した寺院で用いられた軒瓦を、文様および造瓦技術に着目しつつ概観し、その中で長岡宮式軒瓦がどの様に位置づけられるかを検討した。奈良時代後半に存在した文様および造瓦技術が異なる二系統の造営官司（宮造営官司と造東大寺司）が二度の遷都を通じて再編・融合される中で、その渦中で製作された長岡宮式軒瓦は、文様が稚拙なものも含めてほぼすべてが宮造営官司の造瓦技法が用いられていることを確認した。

また、文様と分布から長岡宮式軒瓦を区分し、分布の集中域に存在する殿舎や施設とそれが文献に記載される年号から、区分した軒瓦に製作年代の一定点を与えた。

はじめに

長岡京における瓦研究は、小林清氏に始まる。小林氏は長岡宮出土瓦を難波宮・平城宮・長岡宮式に大別し、それぞれの種に仮番号を付して公表された［小林一九七五］。この成果は、氏が提唱した難波宮大極殿・朝堂院の長岡宮移建説として結実し、発掘調査の進展により確認された。その後も各氏が瓦に関する研究を行ったが、その集大成といえる成果が『長岡京古瓦聚成』の刊行である［山中編一九八七］。この中で、これまで長岡京の瓦研究を中心的に行ってきた藤田さかえ氏は、文様意匠と造瓦技法から長岡宮式軒瓦を平城京の「寺系」工人の系譜下に位置づけた［藤田一九八七、初出：藤田一九八六］。個々の瓦に対する緻密な分析に基づく藤田氏の研究は、長岡宮のみならず、都城における瓦研究において重要な成果といえる。しかし、近年の調査研究の進展によって再考する必要を感じるにいたった。よって、奈良時代末から平安時代初期に生産された都城の軒瓦を概観し、その中で長岡京の軒瓦がどの様に位置づけられるかを示した後、長岡京期の軒瓦に関する諸問題について検討する。

❶奈良時代末～平安時代初期の軒瓦の様相について

まず、研究史の整理を兼ねて、奈良時代末から平安時代初期に各宮都および寺院で用いられた軒瓦について、主流をなす型式の瓦当文様や造瓦技法の特徴を明らかにし、その変遷についてまとめる。軒瓦の型式名については以下の文献に従う。平城宮式：奈文研一九九六、長岡宮式：山中編一九八七・中島二〇〇四、西賀茂瓦窯：近藤編一九七八、岸部瓦窯：吹田市史編纂委一九八一・網二〇〇五、栗栖野瓦窯：網二〇〇五

（1）奈良時代末の軒瓦

平城宮・京の軒瓦は、毛利光俊彦氏が文様・造瓦技法・製作および使用の時期について詳しくまとめている［奈文研一九九一］。以下はこれに従って、奈良時代末の軒瓦の特徴について述べる。

〔平城Ⅳ―一期（天平宝字・天平神護年間：七五七～七六七年）〕

平城宮では、西宮および大膳職地区でA：軒丸瓦六一三三型式A種～C種・六一三四型式A種―軒平瓦六七三二型式A・C・O種、内裏および東院地区でB：軒丸瓦六二八二型式Db・Fb・Hb・Ib種―軒平瓦六七二一型式Hb種が用いられる。軒丸瓦ではAが単弁蓮華文を主に用いた最初の例である。六一三三型式では藤原宮以来の伝統文様である外区の鋸歯文が消滅し、外縁の形状も斜縁から直立縁に変わる。単弁蓮華文＋素文の直立縁は以降の主流をなす軒瓦で、その始まりがこの時期といえる。軒平瓦では、Aは岡本東三氏による東大寺式軒平瓦［岡本一九七六］の一群であるが、毛利光氏は、瓦当文様の細部や顎形状、造瓦技法の違いから、六七三二型式A・C・L・O種を「宮系」六七三二型式とし、東大寺や後述する西大寺で用いられる「東大寺・西大寺系」六七三二型式と区分している。まず瓦当文様では、唐草支葉の巻き込みが弱い点、外区珠文が小さい点、顎形状では、「東大寺・西大寺系」が直線顎あるいは顎に面を持たない曲線顎Ⅰであるのに対し、「宮系」は顎に面を持つ曲線顎Ⅱである点、造瓦技法では、「東大寺・西大寺系」が上原真人氏のいう「凸面押圧技法」［上原一九九四］による整形に対して、「宮系」は伝統を引き継ぐ「凸面叩き技法」によって整形される。つまり文様の関連性が深いといえるが、まったく異なる造瓦工人によって造られた瓦といえる。Bは軒丸・軒平ともに新たに作笵されたのではなく、第Ⅲ期に用いられた笵を改刻したものである。

寺院では、造法華寺司によって天平宝字二・三年に造営されたと思わ

れる法華寺阿弥陀浄土院で、C：軒丸瓦六一三八型式A・F～J種―軒平瓦六七六七型式A・B、六七六八型式A～D種が用いられる。六一三八型式A・F～J種は外縁が鋸歯文の無い素文の傾斜縁である。また唐招提寺では重圏文（六〇一二型式E種）―三重重画文（六五七五型式A・C種）がセットで用いられる。六〇一二型式E種は外縁素文の直立縁、六五七五型式A種は顎形状が曲線顎Ⅱと宮の軒瓦と共通する。これ以外の西大寺、新薬師寺では、造東大寺司の影響を色濃く受ける。この期に造営が始まる西大寺では、D：軒丸瓦六一三三型式R種―軒平瓦六七三二型式M・N種が金堂院の造営（薬師金堂：神護景雲三（七六九）年）に用いられる。六七三二型式M・N種は「西大寺系」に属する。「西大寺系」六七三二型式の特徴は、中心飾りの三葉形の左右が内湾または直線状である点、対葉花文の足が唐草に添って延びる点。唐草左右第一単位の主葉が分解する点、唐草の先端が玉縁状に膨らむ点である。造東大寺司によって天平宝字六・七年頃に修理される新薬師寺では、軒丸瓦六二三六型式A・E種―軒平瓦六七三二型式F種が用いられる。六二三六型式は、外縁が素文の直立縁、六七三二型式F種は東大寺からの転用品である。

〔平城Ⅳ―二期（神護景雲年間：七六七～七七〇年）〕

平城宮では、E：軒丸瓦六一三三型式Da・M種―軒平瓦六七二六型式A・B種、東院地区でF：軒丸瓦六一五一型式Aa・B種―軒平瓦六七五九型式A種、六七六〇型式A・B種、B：軒丸瓦六二八二型式Db・Fb・Hb・Ib種―軒平瓦六七二一Hb種が用いられる。Eの軒丸瓦では、単弁蓮華文、素文の直立縁に加えて、この段階で外区内・外縁を区画する圏線が消滅する。以上の特徴は長岡宮式軒丸瓦へ引き継がれる。軒平瓦は第一支葉が二～三葉で構成される点、対葉花文は欠落するが、中心飾りが上へ巻く唐草の中に、それぞれが分離し左右の二葉が外反する三葉形である点から、六七三二型式の流れをくむと考えられる。顎形状は曲線顎Ⅱ、造瓦技法は凸面叩き技法であり、「宮系」六七三二型式を祖型とする。Fの軒丸瓦は、外縁の形状は素文の直立縁であるが、蓮弁の形状は前代からの系譜を追うことができない。軒平瓦は横花形の中心飾り、中心飾りに向かって派生する唐草文、内区より一段高くし小さな珠文を密に並べる外区など、平城宮・京ではみられない文様構成である。統一新羅の軒平瓦との類似性が指摘されている。軒丸瓦六一五一型式Aa種―軒平瓦六七六〇型式A種は緑釉製品である。「東院玉殿」に葺いた「瑠璃瓦」にあたる。平城宮で釉薬が施される軒瓦には、軒丸瓦六三一四型式E種（緑釉：第Ⅱ期）、軒丸瓦六〇七五型式A種（緑釉：第Ⅳ期）、軒丸瓦六四〇一型式A種（二彩：第Ⅳ期）、軒平瓦六六六七型式D種（緑釉：第Ⅱ期）、軒平瓦六七五九型式B種（三彩：第Ⅳ期）がある。Bは第Ⅳ―一期から引き続き東院地区で用いられた。平城宮ではこの時期で複弁蓮華文がほぼ消滅する。

寺院では、引き続き造東大寺司の影響下にある軒瓦を中心に、一部他の瓦をまじえて堂塔の造営が行われる。東大寺僧坊では、G：軒丸瓦六二三四Aa種・六二三五型式D・K種―軒平瓦六七三二型式D・H種が用いられる。六二三五型式D種は、内・外区を区画する圏線が消滅する。平安京西寺で用いられた、坂瓦窯産複弁蓮華文軒丸瓦に直結する文様である。六二三四Aa種は、複弁が大きく崩れた内区文様である。六七三二型式D・H種は、唐草が分解気味である点が後出的である。西大寺では、東西両塔（西塔：宝亀元（七七〇）年までには完成）の造営にH：軒丸瓦六一三九型式A種―軒平瓦六七三二型式K・R種、I：軒丸瓦六二三六型式A・H・I種―軒平瓦六七三二型式Q・Z種が用いられる。六一三九型式A種は、法華寺阿弥陀浄土院の六一三八型式によく似た文様で、蓮弁間をつなぐように配される間弁が特徴である。外縁は素文の直立縁である。六七三二型式K・R・Q・Z種は、先にあげた「西大寺系」六七三二型式の特徴の中で、退化傾向が強くでる種である。この他、

唐招提寺では、軒丸瓦六二三六型式D・F・G種―軒平瓦六七二五型式A・D種、西隆寺では、創建瓦として軒丸瓦六二三五型式C・I種―軒平瓦六七六一型式A種、補足瓦として軒丸瓦六二三六型式D・F種―軒平瓦六七七五型式A種が用いられる。六七二五型式A・D種は、六七三二型式の特徴を受け継ぐもので、顎形状が曲線顎Iである。

〔平城V期（宝亀～延暦年間：七七〇～七八四年）〕

宮内および東院地区で、J：軒丸瓦六一三三型式Db・L・N・P・Q種―軒平瓦六七二五型式B・C、六七二六型式D・E・F種が用いられる。特に東院地区では、宝亀四（七七三）年の楊梅宮の造営に用いられたと考えられている。軒丸瓦六一三三型式Db種はⅣ―一期のDa種を改刻したもの、N・P種は蓮子が一＋四個、Q種は蓮弁が一二葉と長岡宮式七一三三型式A・E種の直接的な祖型と位置づけられる。また軒平瓦は唐草各単位が、第一支葉一枚、第二支葉一枚の三葉構成となり、六七三二型式から文様が崩れていく。なかでも六七二五型式B種の中心飾りの三葉形が外反しなくなる点、六七二五型式C種の第二支葉が欠ける点、六七二六型式D・F種の左右第三単位外側の小葉がやや湾曲する点が、長岡宮式七七五七型式に引き継がれる文様である。

寺院では、東大寺僧坊で軒平瓦六七三二型式I・V・W種が用いられる他、秋篠寺では、平城宮東院所用瓦を転用して、六〇七五型式A種・六一五一型式Aa種―六七六〇型式A・C種が用いられる。六七六〇型式C種はA種を模して造られた補足瓦である。

（2）長岡京期の軒瓦

長岡宮の軒瓦は、文様の特徴と分布によって次の五つに大別できる。①朝堂院で用いられた軒平瓦六七三二型式Q種、②第二次内裏地区を中心に宮内で用いられた軒丸瓦七一三三・七一四九型式―軒平瓦七七五七・七七八五型式、③宮北郊地域（長岡宮「北苑」）で用いられた軒丸瓦七一七一・七一九二型式―軒平瓦七七二一型式、④長岡京東院など京内離宮推定地および京内寺院で用いられた軒丸瓦七一九三・七一九四型式―軒平瓦七七二二・七七三一型式、⑤出土数が少なく詳細がはっきりしない軒丸瓦七一八一型式などである。④では③の七一九二型式も少量ではあるがともに出土する。詳細は次章に譲り、ここでは概略にとどめる。①の六七三二型式Q種は、大和西大寺で用いられたものと同笵であるが、小澤毅氏が指摘するように[小澤一九九〇]、笵のみが長岡京西郊の谷田瓦窯（京都府長岡京市）に移動し生産されたものである。②の七一三三・七一四九型式―七七五七型式は、平城宮瓦編年第V期の六一三三型式Db・L・N・P・Q種―六七二五型式B・C、六七二六型式D～F種の文様を受け継ぐ。軒平瓦七七八五型式は、平城宮式六七七五型式A種を祖型とするが、右第二単位が反転しないなど稚拙な文様から、非専門工人による笵の作成が指摘されている[山中一九八七]。③では七一七一・七一九二型式ともに前代からの系譜を追うことが難しい文様を用いている。一方七七二一型式は平城宮式六七二一型式をほぼ忠実に模しているが、凸面押圧技法によって平瓦部を成形する。この瓦について、上原氏は造東大寺司系瓦工の製品ではなく、在地系工房をその背景と想定すべきとする[1][上原一九九四]。④では七一九三・七一九四型式は七一九二型式を祖型とし、二度にわたる改刻の結果、瓦当中央に「百」字を陽刻する。軒平瓦では、七七二二型式は当初から中心飾りに「百」字を陽刻する。唐草は七七五七型式と比べて第一支葉の枚数が二枚となるが、先端が玉縁状に膨らむなど基本は六七三二型式の系統に連なると考えられる。七七三一型式は唐草が大きく崩れる。しかし直接の祖型である可能性がある七五一・七五二型式の文様は、これも六七三二型式の系統に属すると考えられる。軒丸瓦の外縁の形状は、すべて丸みを帯びる素文の直立縁で、接合法は接合式である。丸瓦の差し込みが浅いため、瓦当と丸瓦部が分離する出土例が多い。軒平瓦の顎形状はすべて曲線顎Ⅱで、顎幅が

広くなる傾向がみられる。平瓦部の成形は、七七二一型式を除いて凸面叩き技法による。叩きの縄目の方向は縦位が主であるが、七七五七型式、七七二二型式A種の一部に縦位と横位を重ねるもの、七七二二型式A・E種に横位のものがある。

軒丸・軒平瓦ともに、特に前代からの系譜が追えないものに稚拙な文様が多くみられる。しかし造瓦技法とこれによって作成された瓦全体の雰囲気は、文様の精粗にかかわらず共通する。これは造瓦工人が共通した技術または規範によって瓦を生産したことを示している。

（3）平安時代初期の軒瓦

平安時代初期の軒瓦については、平安宮出土資料に未公表のものが多いなどの制約もあって、岸部瓦窯（大阪府吹田市）、西賀茂・栗栖野瓦窯（ともに京都市）など瓦窯出土資料を中心にした分析が進められてきた。その中で、上原氏は、八世紀後半～九世紀前半における軒平瓦の造瓦技法と瓦当文様の系譜関係から、平安宮造営当初の造瓦体制を考察した［上原一九九四］。その論考の中で上原氏は、平安時代初期の軒平瓦を、瓦当文様の系譜から、a：長岡宮式軒平瓦をそのまま受け継いだもの、b：東大寺式軒平瓦（造東大寺司）の系譜をひくもの、c：遷都時に新たに考案されたものの三つに大別した。軒丸瓦についても同じ基準を用いて分別することが可能と思われるので、ここでは軒丸・軒平あわせて提示する。

aでは、七一三三―七七五七の系譜下にあるNS一〇九・一一〇―NS二〇三・二〇四がそれにあたる。このうちNS二〇三は長岡宮式七七五七型式E種と同笵であり、造長岡宮使との深いつながりを示す。ただし長岡京出土の七七五七型式E種と西賀茂瓦窯出土のNS二〇三は平瓦部の成形技法、胎土や焼成が異なることから、前者を西賀茂瓦窯で焼成した可能性は現段階ではかなり低いと思われる。長岡宮所用瓦を焼成した瓦窯から、笵が移動したものと考えられる。岸部瓦窯、大山崎瓦窯[2]（京都府大山崎町）、芝本瓦窯（京都市）においても、それぞれの瓦窯でのみ製作された軒丸瓦の中に、間弁の無い単弁軒丸瓦が確認でき、生産量の多寡はともかく一連の流れを見出すことができる。

bでは、六二三五―六七三二の意匠を最も濃く受け継ぐ瓦は、西寺所用瓦を生産した坂瓦窯（大阪府枚方市）の軒瓦である。造西寺司の設置は延暦十六（七九七）年以前と考えられており、坂瓦窯の操業開始時期も八世紀末をくだらない時期に想定できる。西賀茂瓦窯では、軒平瓦NS二〇二・二〇六・二〇七・二〇八型式に意匠の系譜を見出すことができる。特にNS二〇二・二〇六型式では、中心飾りの三葉形と対葉花文、主葉が分解する唐草などに、「西大寺系」の特徴が反映される。軒丸瓦では、NS一五一・一五二・一五四型式など、大形の中房やA系統の間弁をもつ複弁蓮華文などにその系譜を見出せるが、内・外区を二重の圏線で区画するなど新たな意匠も現れる。複弁蓮華文軒丸瓦は平安時代前期にかけて、軒丸瓦の主流をなす文様として用いられる。また芝本瓦窯では、軒丸瓦は前述の通りであるが、坂瓦窯の軒平瓦と類似する、中心飾りに三葉形を配し、唐草の先端を強く巻き込む軒平瓦が造られる。

cでは、軒丸瓦NS一一一―軒平瓦NS二〇五を代表例とする。NS一一一は桜花状の単弁や先端が開かない間弁、内・外区を二重の圏線で区画する点、NS二〇五は先端が枝分かれする対向C字形中心飾り、主葉が連続する唐草に新たに創出された意匠が確認できる。ただしNS一一一の二重の圏線やNS二〇五の唐草の様子は二と基本的に共通する。NS一一一は笵が栗栖野瓦窯に移動し、緑釉製品（HT一〇一型式）が造られる。これと組み合う緑釉軒平瓦（HT二〇一型式）や岸部瓦窯産のKb一・五・六型式などもこの一群に含まれる。また大山崎瓦窯でもこの一群の瓦が出土している[3]。その後上ノ庄田瓦窯など平安時代前期の軒平瓦瓦当文様の主流をなす文様となる。

以上の三つの系統は、西賀茂瓦窯で共存し、岸部瓦窯・大山崎瓦窯においても、瓦窯固有の軒瓦に複数の系統がみられることから、瓦窯を横断するように存在する。

造瓦技法をみると、軒丸瓦は接合式で、外縁は幅広で端部が丸みを帯びるものと平坦なものがある。二・三の軒丸瓦では平坦なものが顕著である。また丸瓦部の差し込み位置が浅く、瓦当部と丸瓦部が分離する資料が多くみられる。軒平瓦では瓦窯によって技法が異なる。西賀茂瓦窯では凸面叩き技法が主流で、岸部、坂、芝本、大山崎瓦窯[4]では、凸面押圧技法が主流である。しかし西賀茂瓦窯でも凸面に布目が残る平瓦が出土しており、また岸部瓦窯では凸面に布目を残しながら縄叩きを施す例がある。これ以降九世紀中頃では凸面押圧技法が主流となり、一〇世紀代では凸面叩き技法の軒平瓦は確認できない。顎形状はすべて曲線顎Ⅱで顎の幅も広いものが多い。

また平城宮では、延暦年間、長岡京遷都および平安京遷都直後の様子は不明であるが、大同四（八〇九）年の平城上皇による平城旧都への還御によって、行在所が造営される。第一次大極殿地区第Ⅲ期以降がそれにあたる。この時期の軒瓦には、軒丸瓦七二四一型式A種、七二四五型式A種などがある。ともに複弁蓮華文で、外縁が幅広で頂部が平坦である特徴がある。上記以外に寺院の造営、修理に用いられた軒瓦がいくつか確認されているが、このうち二型式が長岡宮、京から出土している。図6―1は不退寺の創建に用いられた平城宮式七三四九型式である。中房に蓮子一個と周囲に四弁の複弁蓮華文が六葉配置される、単弁一三葉蓮華文軒丸瓦である[中島二〇〇六]。宮東面で一条条間小路に面する宮城門の調査（長岡宮跡第三七三次調査）で出土した。図6―2は薬師寺で九世紀初頭に用いられた薬師寺三八型式・平城宮式七二四三型式軒丸瓦である[國下・秋山・清水一九九二、中島二〇〇五]。左京三条三坊三町（左京第二一四次調査）で長岡京期の井戸から出土した。証拠となる軒瓦はごく少数しか出土していないため確実ではないが、これらの瓦は、生産の開始時期が長岡京期にさかのぼる可能性がある。

（4）小結

以上を文様、造瓦技法からまとめる。

〔文様〕

軒丸瓦では、奈良時代末、平城宮では間弁の無い単弁蓮華文六一三三（七一三三）型式系の一群が用いられる。この文様は長岡宮―平安宮を通じて確認できるように、再度の遷都を経ても宮造営官司で受け継がれる。一方独立した間弁をもつ複弁蓮華文六二三五・六二三六型式系の一群は、平城京では造東大寺司とこれに関連する造寺司が造営・修理した寺院で用いられた。長岡宮では確認できないが、平安宮所用の瓦窯では主をなす一群として用いられる。また平安宮では、新たな意匠として独立した間弁をもつ単弁蓮華文NS一一一が創出され、緑釉製品を中心に用いられる。外縁の形状は、斜縁から鋸歯文の消滅により中央寄りの面に文様帯としての意義が無くなり直立する（直立縁）。また幅が広がり、端面が丸みを帯びるものから平安時代初期には平坦へ変化する。

軒平瓦は、ほぼ六七三二型式とその亜種によって占められる。ただし亜種の創出過程については、六七三二型式の流麗な文様の特徴である、対葉花文および支葉の省略によって造られる「宮系」の一群（平城宮式六七二五・六七二六型式―長岡宮式七七五七・七七二二型式―西賀茂瓦窯（平安宮）NS二〇三・二〇四型式）と、主葉の分解と主葉支葉の接続によって造られる一群（「東大寺・西大寺系」六七三二型式―西賀茂瓦窯NS二〇二・二〇六型式）の二つの大きな流れが認められる。平安宮で新たに創出された文様である西賀茂瓦窯NS二〇五は中心飾りや主葉に新たな意匠を取り入れる。

ただし、西賀茂、岸部、大山崎瓦窯では三つの系統すべて、栗栖野瓦

窯では二系統の瓦を製作している点が特徴である。古閑正浩氏、網伸也氏が指摘するように[古閑二〇〇四、網二〇〇五]、これらの瓦窯ではそれぞれの間で笵の移動が盛んに行われており、移動してきた笵を手本に新しい瓦を模作した可能性が考えられる。

〔造瓦技法〕

軒丸瓦の接合法はほぼすべて接合式による。奈良時代中頃にみられた一本造り式の軒丸瓦は、長岡京期には確認できず、平安宮では九世紀中頃以降に主流となる。また長岡京期～平安時代初期では、丸瓦部の差し込み位置が浅くなる特徴が共通する。軒平瓦の平瓦部成形技法では、平城宮では「凸面叩き技法」、造東大寺司系では「凸面押圧技法」ときれいに分かれる。顎形状も同様である。宮造営官司と造東大寺司（および系列下の造寺司）では、技術的な系譜が異なる工人集団が所属していたことを示す。長岡宮では、明確に後者が製作した瓦は確認できていない。顎形状はすべて曲線顎Ⅱで、幅が広くなる。平安時代初期では、奈良時代のようにきれいに分かれるわけではないが、前者は西賀茂瓦窯、後者はこれ以外の瓦窯で主流をなす。対して顎形状は、成形技法の違いにかかわらず曲線顎Ⅱである。これは、奈良時代、特に軒平瓦において顕著であった瓦当文様の系譜と造瓦技法の関係が崩れ、平安時代初期では、顎形状にみられる全体にわたる共通性の中で、系譜の異なる二つの造瓦技術は瓦窯ごとにまとまりを見せる。しかし、瓦当文様と瓦窯の関係は非常に薄くなる。言い換えれば、瓦笵（とその製作主体および工人）と造瓦工人が乖離して軒瓦の製作にあたった結果と考えられる。

以上から、長岡京期の軒瓦はその大半を、上原氏のいう「主に宮殿を造営する中央官司が管轄した瓦工房」[上原一九九四]の伝統的技法をもつ工人、つまり造長岡宮使所属の瓦工房および造瓦工人によって製作された瓦といえる。

❷長岡宮式軒瓦の文様・造瓦技法と生産

次に長岡宮式軒瓦について、先ほど述べた文様・造瓦技法の特徴を詳細に検討する。また分布による使用先や瓦窯など他の特徴を加えて、長岡宮使の瓦生産体制について考えてみたい。以下は先述の①～⑤の区分を用いて論述する。

（1）文様・造瓦技法

①では、軒平瓦六七三二型式Q種がある。先述の通り、大和西大寺の創建瓦のひとつである。これまで造東大寺司所属の工人が、西大寺造営のため谷田瓦窯で同型式の瓦を製作した後、長岡京遷都に伴い瓦笵をそのまま用いて再度操業したとする山中章氏の見解があったが[山中一九八七]、笵傷の進行具合と造瓦技法の差を西大寺例と谷田瓦窯例で比較検討した小澤氏の研究により、西大寺所用瓦窯から笵のみが谷田瓦窯に移動し、同窯の生産終了後、笵が西大寺所用瓦窯へ再度移動したことが明らかとなった[小澤一九九〇]。筆者も西大寺例を実見し、顎形状、造瓦技法がまったく異なることを確認した。[5] 谷田瓦窯産（長岡宮・京出土例は、顎形状が曲線顎Ⅱ、平瓦部凸面には、「凸面叩き技法」による縦位の縄叩き痕が明瞭に残る。これは宮造営官司所属の工人による製品であることは間違いない。しかし、小澤氏も指摘するが、顎形状については、個体によって顎面の幅がごく狭く、曲線顎Ⅰ状を呈するものがみられる。また左京第三〇〇次調査例（図7―4）では、瓦当左半は曲線顎Ⅱ、右半の一部が曲線顎Ⅰ状という個体が確認できる。製作工人の技術力の低さに起因するものであるが、これは長岡京遷都に伴い造長岡宮使所属の瓦工房へ再編成された、在地系瓦工人の習作ではないかと想像する。また笵の移動によって長岡京期につくられた可能性がある、他宮都の軒瓦が

確認された。北辺官衙（北部）の宮第二九一次調査で出土した重画文軒平瓦六五七二型式（図6―3）である［中塚二〇〇六］。文様は、弧線の厚さや断面形など難波宮式六五七二型式に類似するが、顎形状は曲線顎Ⅱで、瓦当面と顎面のなす角度は鋭角である。顎の長さは二・六cmと長い。平瓦部は「凸面叩き技法」によって成形され、凸面に縦位の縄タタキ痕、凹面に布目痕が残る。焼成は燻し焼き風で、造瓦技法、焼成は長岡宮式に酷似する。計測値から、おそらく幅二七cm前後に復原できる。難波宮式では、A・B・G種に近似する値であるが、顎形状が曲線顎Ⅱの軒平瓦は出土していない。[6]平城宮では六五七二型式E種が曲線顎Ⅱであるが、図をみる限り、瓦当面と顎面のなす角度は鈍角で、弧線の断面形も異なる［奈文研一九九六］。顎形状および顎幅から長岡京期前後に製作された瓦であることは間違いないように思われる。しかし、実物の比較検討を行っておらず、難波宮式と同笵か否かは不明である。また造長岡宮使瓦窯ではなく、難波宮周辺の寺院付属瓦窯で生産された可能性も今のところ否定できない。②では、文様・造瓦技法ともに平城宮を引き継ぐ軒丸瓦七一三三・七一四九型式―軒平瓦七七五七型式が用いられる。前にならえば、新編工人の技術力上昇により、工人全体の技術力が安定した結果といえよう。ただし、軒丸瓦では、丸瓦の差し込み位置が浅くつくられるようになり、瓦当部と丸瓦部が遊離する個体が多く確認できる。大量生産をこなすための省力化と思われるが、これも西賀茂瓦窯に引き継がれる。瓦当文様では、同系統の文様をもつ笵（同文異笵）を多種用意する点や、軒丸瓦七一三三型式A・E種のように、磨耗した笵を同じように彫り直すのでなく、意匠を変えるあるいは壊すような改刻を行う特徴がみられる。軒丸瓦七一三三型式A・E種、七一四九型式C種は、蓮子を「十」字状に連結させる。七一三三型式A種は改刻によって連結されることが確認されており、七一三三型式E種も改刻前の個体は確認されていないが、蓮子の形状から改刻が想定されている。両者を祖型とする七一四九型式C種は、当初から連結された蓮子を文様とする。軒平瓦七七八五型式は、文様は前代の系譜をあまり引き継がず、かつ稚拙であるが、顎形状、造瓦技法は七七五七型式と変わるところはなく、造長岡宮使所属の瓦工房の製品と考えられる。③では、軒丸瓦七一七一・七一九二型式に、前代の系譜が不明瞭な文様と造長岡宮使の造瓦技法の組合せが確認できる。七一七一型式は、蓮子の数が多く（一＋八個）、蓮弁が凹弁状である点、七一九二型式は、蓮弁が素弁状、外区に二重の圏線を配置してその間に珠文を配置する点が、前代からの系譜が追えない文様構成をもつ。しかし外縁の形状や接合技法の特徴は七一三三型式と基本的に同じである。軒平瓦七七二一型式については、個体レベルでの詳細な検討を行っておらず、前述した上原氏の見解以上の考えを持ち合わせていない。また③は長岡京内の乙訓寺、宝菩提院廃寺の他、樫原廃寺、北白川廃寺、北野廃寺（以上京都市）、井手寺跡（京都府井手町）、高麗寺跡（京都府山城町）など山背国内の古代寺院でも出土する。塔付近から出土する例が多いことから山中章氏は、延暦十年の「山背国内諸寺の浮図（塔）の修理」に際して用いられたと考察した［山中一九八九］。肯首すべき見解であるが、さらに梅本康広氏によって長岡京例が諸寺院例に先行することが確認された［梅本他二〇〇五］。梅本氏は、長岡宮「北苑」出土の軒丸瓦七一七一型式を詳細に検討し、笵傷によって三段階の変遷が追えることを明らかにした。さらに「北苑」では一～三段階の瓦が出土するが、宝菩提院廃寺、樫原廃寺、北白川廃寺には確認した限り三段階の瓦しかないことから、二段階の瓦を「北苑」造営用、三段階の瓦を「浮図の修理」用の製品であると指摘している。④については京内離宮の造営を目的として製作された瓦であると以前に述べたことがあるので［中島二〇〇二］概略にとどめる。軒丸瓦の文様は、③の軒丸瓦七一九二型式を直接の祖型として、七一九三型式はその亜型、七一九四型式は七一三三型式型の蓮弁を組み合わせたものといえる。少数ながら七一九二型式が共伴

して出土することはこれを裏付けると思われる。軒平瓦では、大きく崩れはするが六七三二型式の伝統を受け継ぐ文様を用いる。また同文異笵（七七二二型式）、二回の改刻（七一九三・七一九四型式）は②と同じであり、長岡宮式軒瓦の特徴のひとつといえる。造瓦技法は①～③と同じく、軒丸瓦は接合式、軒平瓦は曲線顎Ⅱ＋「凸面叩き技法」である。七七二二型式Ａ・Ｅ種には、幅狭で細長い原体に縄を巻き付けたタタキ板で狭端側から六回叩く、特殊な横位の縄タタキ痕が確認できる。また京内寺院および山背国内の古代寺院でも出土するが、北野廃寺瓦窯・広隆寺出土の七七二二型式Ｆ種と山背国分寺出土の七七二二型式Ｃ種は、改刻、笵傷の先後関係および「百」字を笵面または瓦当面でつぶす点から平安時代に造られた可能性が高く、「浮図の修理」には専ら③が用いられたことを指摘したことがある[中島二〇〇四]。さて④の大きな特徴は、瓦当面に陽刻される「百」字である。「百」は「旨」の異体字であり、長岡京造営に桓武天皇直属の内廷官司である勅旨所が深く関与した証拠と考えられる。軒丸瓦七一九三型式Ａｃ種・七一九四型式Ａｃ種、軒平瓦七七二二型式に確認できる。しかし軒丸瓦と軒丸瓦では、「百」字を文様に取り入れる過程がやや異なる。七七二二型式では当初から円圏の中に組み込まれ、中心飾りとして用いられる。同文異笵のなかで、文字あるいは円圏の形状を微妙に変えており、製品を区別するメルクマールとしても利用されたと思われる。一方軒丸瓦二種は、二回目の改刻時において、瓦当面中央を大きく方形に区画し、その中に陽刻する。七一九三型式Ａｃ種では方形区画にあわせて蓮弁を三角形状に改刻する。軒丸瓦本来の文様をまったく無視するような改刻は、②・③にみられた稚拙な文様と同じく、非専門工人によって瓦笵が作成された結果と考えられる。また先に指摘した造平安宮使所属の瓦工房における瓦当文様系譜と製作技法の乖離は、非専門工人の登場により瓦笵作成を担当する工人が瓦工人集団から分離されたことが原因ではないか。想像をたくましくすれば、この分離は勅旨所や、網氏が関与を指摘する近衛府、兵衛府など[網二〇〇二]非造営官司が造営に関与することによって生じたのではなかろうか。筆者も述べたことがある「勅旨所の長岡京造営に対する関与」とは、瓦工人とはまったく関係のない工人を造長岡宮使の瓦工房から切り離して直接管轄下におき、伝統にしばられない、勅旨所の思い通りの文様を刻ませたことを意味するのではないかと思う。これは瓦工人集団がどのような体制・編成で、どのような過程を経て軒瓦を製作したかについて漠然としたイメージに基づいており、まったく思いつきの域を出ない考えである。筆者の今後の課題のひとつである。

（2）瓦窯

長岡宮式軒瓦を生産した瓦窯は、谷田瓦窯（京都府長岡京市）、萩之庄瓦窯（大阪府高槻市）の二例が確認されている。山中章氏は、瓦窯出土資料を基に胎土・焼成の違いから、それぞれの瓦窯の製品を推定している[山中一九八七]。谷田瓦窯産には、軒丸瓦七一三三型式Ｅｂ種（ゴチックは出土資料、以下同じ）、七一四九型式Ｃ種、軒平瓦六七三二型式Ｑ種、七七五七型式Ａａ・Ａｂ・Ａｃ・Ｂ・Ｃ・Ｄ種、萩之庄瓦窯産には、軒丸瓦七一三三型式Ａａ・Ａｂ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅｃ・Ｆ・Ｇ種、七一八一型式、軒平瓦平城宮式六七七五型式Ｂ種[7]、七七八五型式、重画文[8]である。すべて①・②の瓦である。しかし両窯とも正式な調査が行われていないことから詳細は不明である。また、③・④を焼成した瓦窯はまったく不明である。

（3）分布

分布については山口均氏が詳しくまとめている[山口二〇〇三]。それによれば、長岡宮および京域では、集中する地区と散発的に分布する地区があり、集中する地区では出土する型式がまとまる傾向が看取できる。

この傾向は、先に述べた文様による区分(①～④)にほぼ合致する。宮内では、朝堂院西面大垣周辺を中心に、①軒平瓦六七三二型式Q種が出土する。この他宮および京域各所で散発的に出土する。次に第二次内裏地区およびその南方の内裏南方官衙、朝堂院南方官衙を中心に、②軒丸瓦七一三三・七一四九型式―軒平瓦七七五七・七七八五型式が出土する。この他京域および京内の寺院(乙訓寺、鞆岡廃寺、宝菩提院廃寺)で出土する。左京域では三条大路以北の東二坊大路周辺、また乙訓寺とその周辺(右京三条三坊)、鞆岡廃寺(右京八条三坊)で比較的まとまって出土する。宮北方の北辺官衙(北部)地区からその北、宮北郊の宮北郊地域(長岡宮「北苑」)では③軒丸瓦七一七一・七一九二型式―軒平瓦七七二一型式が出土する。③は乙訓寺、宝菩提院廃寺(右京北一条二坊)でまとまる他、左京四条一・二坊、五条二坊で比較的まとまって出土する。また宮東辺官衙地区で一点確認されている。左京域では、長岡京東院、左京二条二坊五・六・十一・十二町(猪隈院か)、左京二条二坊十町など京内離宮推定地を中心として、二条大路以北の一・二坊で④軒丸瓦七一九二・七一九三・七一九四型式―軒平瓦七七二二・七七三一型式が出土する。また鞆岡廃寺では比較的まとまって、乙訓寺、宝菩提院廃寺で数点出土する他、宮北郊の物集女車塚古墳墳丘および周辺、北東郊の大藪遺跡で確認された。加えて最近長岡宮北辺官衙(北部)地区で行われた長岡宮跡第二九一次調査から、軒平瓦七七二二型式D種(図6―4)が一点確認された「中塚二〇〇六」。④が宮北部地域で出土した初例である。[9]また③・④は山背国内の古代寺院でも出土する点は先述の通りである。さて偏在的な分布は、特定の施設造営用にその軒瓦が製造・使用された結果と考えられる。そこで『続日本紀』・『日本後記』・『日本紀略』などに記載される施設・殿舎の完成記事などから類推できる、①～④の製作年代は以下の通りである。

①：延暦三(七八四)～五(七八六)年
造長岡宮使の任命(延暦三年)、太政官院(朝堂院)の完成(延暦五年)

②：?～延暦八(七八九)年
第二次内裏(東宮)の完成(延暦八年)

③：?～延暦十(七九一)年
山背国内諸寺の浮図の修理(延暦十年)

④：?～延暦十二(七九三)年
諸院巡覧(延暦十一年)、東院遷御(延暦十二年)

以上の年代は、すべてが製作開始あるいは終了の年代を示すものではなく、メルクマールとして提示するものである。長岡宮式軒瓦の製作開始は、準備は始まっているかもしれないが、造長岡宮使の任命を遡ることはないと考えられる。①の終了は、瓦笵が大和西大寺所用瓦窯に移動する時点を越えることはないが、その時期は不明である。宮・京域でもある程度出土することを考えると、②の段階でも引き続き製作された可能性は否定できない。②の開始は、限りなく延暦三年に遡りうるが、当初から生産されていれば、①が用いられた太政官院垣などに用いられるはずであり、延暦五年あるいは太政官院垣を築いたことによる報償記事が記載される延暦四年を遡る可能性は低いであろう。②の終了は、延暦八年におさまる可能性は低いと思われる。例えば、改刻によって後出性が確認できるものや、西賀茂瓦窯に笵が移動する軒平瓦七七五七型式E種などは、③・④とともに生産が続けられた可能性が高い。③の開始時期は②と同じ理由で延暦八年をあまり遡りえない。③のうち軒丸瓦七一七一型式は、「浮図の修理」にあわせて瓦笵が造長岡宮使から寺院付属工房へ移動したと考えられることから、延暦十年は③の終了時期といえる。④の開始時期は、これまで③の終了後と考えていたが、宮北辺官衙(北部)地区からの出土が確認されたことによって、③と並行して生産が進められた可能性が高くなった。④の終了時期、つまり長岡京東院の完成によって、造長岡宮使瓦工房の使命は終焉を迎える。操業の終了は施設完成より幾分早くなると思われるが、造営主体は変われども瓦工房は操業停止まで瓦生産を

継続しており、平安宮造営に向けての瓦工房再編は、一・二年の差ではあるが、網氏が指摘する延暦十年までは遡らないように思う［網二〇〇二］。

おわりに―瓦からみた長岡京造営―

本稿では、奈良時代末から平安時代初期、つまり光仁・桓武朝において都城および寺院で使用された軒瓦について、瓦当文様および造瓦技法を検討することによって、造営官司瓦工房の技術的系譜の中における長岡宮式軒瓦の位置づけを行った。

①から④へと生産が進むにつれ、瓦当文様は系譜を追うことができないまで変化していくが、造瓦技法は、上原氏のいう伝統的官営工房の技術を保持し続け、西賀茂瓦窯に受け継がれる。造長岡宮使は、藤田氏が指摘した造東大寺司系の工人が再編成されたのでなく、宮造営官司の工人を中心に、在地系工人に技術を伝習させて生産を行ったことが判明した。長岡宮式軒瓦は、まさに「都城の瓦」である。また、文様・造瓦技法と分布、文献による暦年代から区分した①～④は、長岡宮・京造営の進行過程とみることができる。第一は大極殿・太政官院の造営、第二は第二次内裏の造営、第三は「北苑」の整備、第四は京内離宮の整備である。第一の段階では、長岡宮式軒瓦の作笵が間に合わず、技術伝習を兼ねて便宜的に旧都の瓦笵を用いて造瓦をはじめ、第二の段階では平城宮の伝統を色濃く受け継ぐ軒瓦を用い、宮内の中心施設を造営する。第三段階で宮北方域の整備を行い、整備終了後、不要になった笵を下賜して「浮図の修理」を行う。第四段階では京内の公的施設の整備を行うが、平安京遷都に伴う東院の造営によって長岡京の造営は終了する。

拙論をまとめるにあたり、網伸也、古閑正浩、梅本康広、山口均、山中章の各氏に多くのご教示、ご助言をいただいた。記して感謝する次第である。

註

(1) 顎形状が曲線顎Ⅱであることからみても単純に造東大寺司系工人の手によるとはいいがたく、個々の瓦を詳細に検討する必要はあるが、肯首すべき見解であると思われる。

(2) 平成一六（二〇〇四）年一一月から平成一五（二〇〇五）年三月にかけて、京都府乙訓郡大山崎町で発見された平安宮所用の大規模瓦窯である。六基の平窯が整然と並列して検出された。出土軒瓦には、西賀茂・岸部瓦窯との同笵品と独自笵によるものがあり、消費地では平安宮、嵯峨院、山崎離宮推定地から出土している。大山崎町文化協会・大山崎ふるさとガイドの会二〇〇六参照。

(3) 大山崎町文化協会・大山崎ふるさとガイドの会二〇〇六の古閑資料六、大山崎瓦窯八・一六～一八。

(4) 大山崎町教育委員会古閑正浩氏のご教示による。

(5) 西大寺出土六七三二型式Q種の実見にあたっては、奈良国立文化財研究所（当時）山崎信二、渡辺丈彦両氏のお世話になった。

(6) 八木久栄氏のご教示による。

(7) 平城宮式六七七五型式B種は、平城宮、興福寺で出土しているが、毛利光俊彦氏はその生産地は萩之庄瓦窯でない別の瓦窯で、上記所用瓦が製作された後、笵が萩之庄瓦窯に移動したと考えている。奈文研一九九一参照。

(8) 木村捷三郎氏によって六五七二型式と六五七四型式の二種と紹介されている。種別など詳細は不明である。木村一九八七参照

(9) 財団法人向日市埋蔵文化財センターが所蔵する軒瓦カードを再確認したところ、宮北郊に位置する笹屋遺跡で、軒丸瓦七一九三型式Ａｂ種が一点表採されていたことを確認した。

引用・参考文献

網　伸也二〇〇二　「軒瓦に現れた平安遷都の裏方たち」『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』　藤澤一夫先生卒寿記念論文集刊行会

網　伸也二〇〇五　「平安宮造営と瓦生産」『古代文化』第五七巻第一一号　財團法人古代學協會

上原真人一九九四　「前期の瓦」『平安京提要』（財）古代学境界・古代学研究所編

梅本康広・松崎俊郎・松田留美・辻本裕也二〇〇五　「長岡宮跡第三一六次（七ＡＮＢＫＤ地区）～長岡宮「北苑」、笹屋遺跡～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第六六集　財団法人向日市埋蔵文化財センター

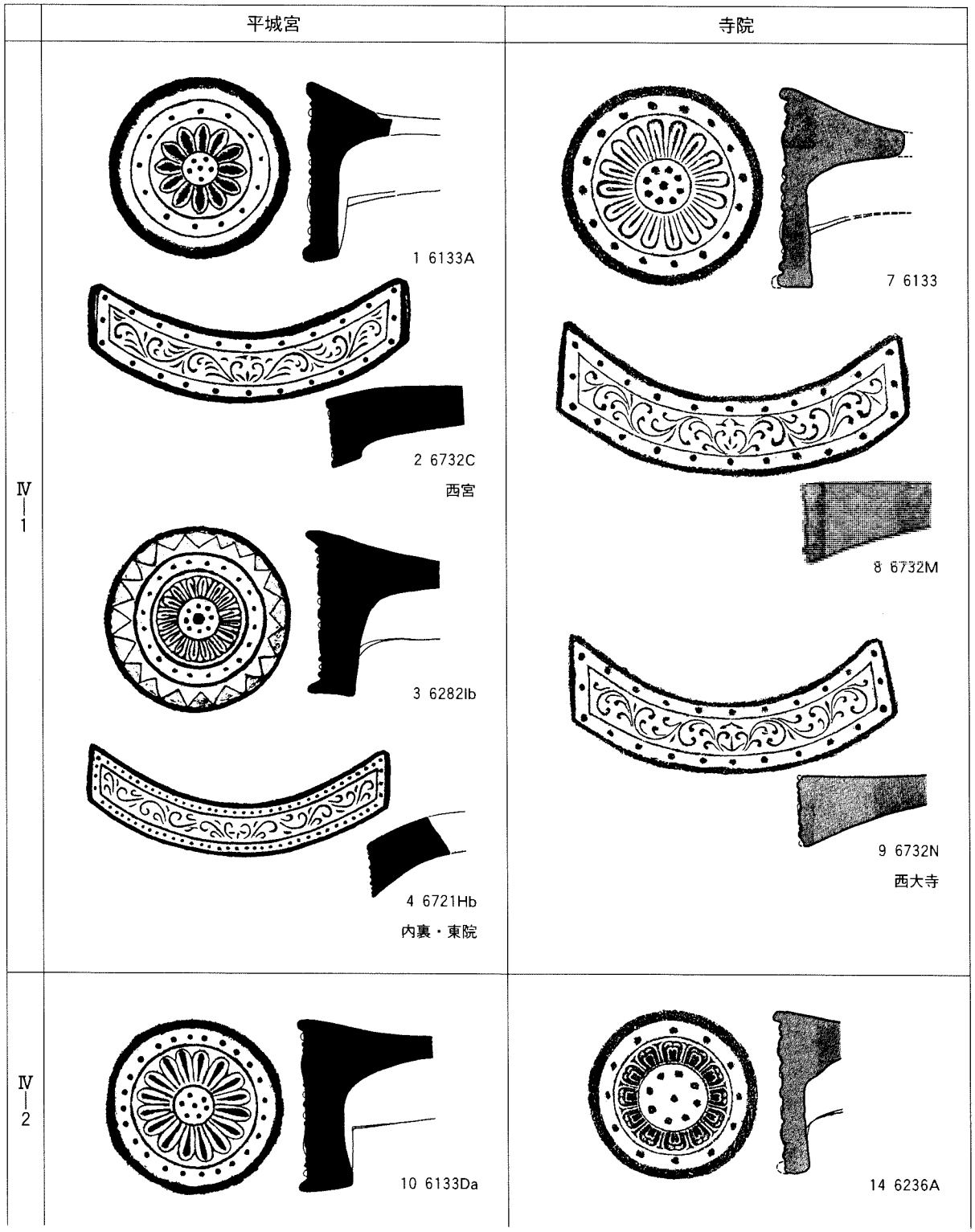
大山崎町文化協会・大山崎ふるさとガイドの会二〇〇六　『ミニシンポジウム平安京

の瓦生産と大山崎瓦窯』資料
岡本東三一九七六　「東大寺式軒瓦について―造東大寺司を背景として―」『古代研究』九元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究会
小沢　毅一九九〇　「第四章―四　西大寺創建および復興期の瓦」『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』　西大寺
木村捷三郎一九八七　「長岡京所用瓦雑感―官窯を中心に―」『長岡京古瓦聚成』、向日市教育委員会
國下多美樹・秋山浩三・清水みき一九九二　「長岡京跡左京第一九六・二一四次（七ANEGZ―一・二地区）～東二坊大路・二条大路交差点、左京三条三坊一町、左京二条三坊四町、鶏冠井清水遺跡～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第三四集　財団法人向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会
古閑正浩二〇〇四　「廃都後における長岡京地の再編と瓦―中福知遺跡の再評価をめぐって―」『古代文化』第五六巻第八号　財團法人古代學協會
小林　清一九七五　『長岡京の新研究』全　比叡書房
近藤喬一編一九七八　『西賀茂瓦窯跡』　財團法人古代學協會
吹田市史編纂委員会編一九八一　『吹田市史』第八巻別冊
中島信親二〇〇二　「東院出土の「寺院系」長岡宮式軒瓦」「向日市埋蔵文化財調査報告書』　第五五集　財団法人向日市埋蔵文化財センター
中島信親二〇〇四　「「離宮系」長岡宮式軒瓦の変遷について」『考古論集　河瀬正利先生退官記念論文集』河瀬正利先生退官記念事業会編
中島信親二〇〇五　「長岡京古瓦聚成（補遺編）前編」「（財）向日市埋蔵文化財センター年報　都城』一六　財団法人向日市埋蔵文化財センター
中島信親二〇〇六　「長岡宮跡第三七三次（七ANDST―五地区）～北辺官衙（南部）、東一坊大路、森本遺跡～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第七〇集　財団法人向日市埋蔵文化財センター
中塚　良二〇〇六　「長岡宮跡第二九一次（七ANBDC地区）～北辺官衙（北部）、殿長遺跡～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第七一集　財団法人向日市埋蔵文化財センター
奈良国立文化財研究所一九九一　『平城宮発掘調査報告XⅢ　内裏の調査Ⅱ』
奈良国立文化財研究所一九九六　『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』
藤田さかえ一九八六　「いわゆる長岡宮式軒瓦の意匠と技法の特徴」『長岡京古文化論叢』中山修一先生古希記念事業会編
藤田さかえ一九八七　「第二章第二節　長岡京の瓦」『長岡京古瓦聚成』、向日市教育委員会
山口　均二〇〇三　「長岡京造営論ノート～長岡宮式軒瓦の再検討～」『立命館大学考古学論集Ⅲ』　立命館大学考古学論集刊行会
山中　章編一九八七　『長岡京古瓦聚成』、向日市教育委員会
山中　章一九八七　「第二章第一節　長岡京造営と瓦」『長岡京古瓦聚成』、向日市教育委員会
山中　章一九八九　「長岡宮式軒瓦と寺院の修理―延暦一〇年の山背国の浮圖の修理をめぐって―」『古瓦図考』廣田長三郎編

図版掲載軒瓦掲載文献

秋山浩三・山中章・清水みき一九八八　「長岡宮跡第二〇〇次（七AN六J地区）～北辺官衙（北部）、殿長遺跡～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』向日市教育委員会　第二四集
上原真人一九九四　「前期の瓦」『平安京提要』（財）古代学境界・古代学研究所編
梅本康広・松崎俊郎・松田留美・辻本裕也二〇〇五　「長岡宮跡第三一六次（七ANBKD地区）～長岡宮「北苑」、笹屋遺跡～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第六六集　財団法人向日市埋蔵文化財センター
梅本康広他二〇〇二　「長岡京跡左京北一条三坊二町」『向日市埋蔵文化財調査報告書』　第五五集　財団法人向日市埋蔵文化財センター
小沢　毅一九九〇　「第四章―四　西大寺創建および復興期の瓦」『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』　西大寺
近藤喬一編一九七八　『西賀茂瓦窯跡』　財團法人古代學協會
中島信親二〇〇四　「「離宮系」長岡宮式軒瓦の変遷について」『考古論集　河瀬正利先生退官記念論文集』河瀬正利先生退官記念事業会編
中島信親二〇〇五　「長岡京古瓦聚成（補遺編）前編」「（財）向日市埋蔵文化財センター年報　都城』一六　財団法人向日市埋蔵文化財センター
中島信親二〇〇六　「長岡宮跡第三七三次（七ANDST―五地区）～北辺官衙（南部）、東一坊大路、森本遺跡～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第七〇集　財団法人向日市埋蔵文化財センター
中塚　良二〇〇六　「長岡宮跡第二九一次（七ANBDC地区）～北辺官衙（北部）、殿長遺跡～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第七一集　財団法人向日市埋蔵文化財センター
奈良国立文化財研究所一九九六　『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』
平安博物館編一九七七　『平安京古瓦図録』
堀内明博他二〇〇二　「長岡京左京東院跡の調査研究　正殿地区」『古代學研究所研究報告』、第七輯、財團法人古代學協會
山中　章編一九八七　『長岡京古瓦聚成』、向日市教育委員会

（財団法人向日市埋蔵文化財センター、国立歴史民俗博物館共同研究員）
（二〇〇六年五月三一日受理、二〇〇六年八月一〇日審査終了）



S=1/6

図1　奈良時代の軒瓦—1

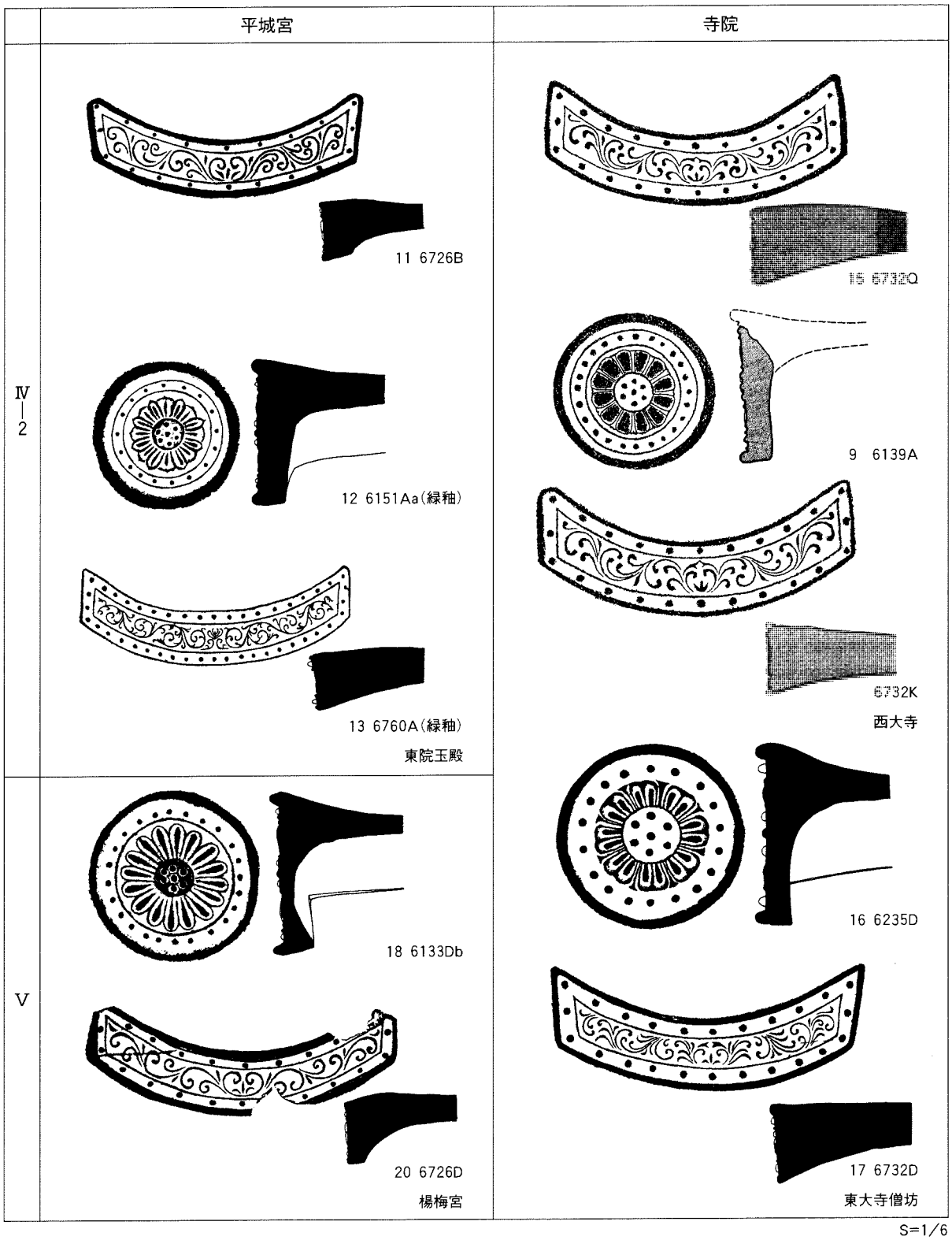

平城宮
寺院
Ⅳ—2
11 6726B
12 6151Aa(緑釉)
13 6760A(緑釉)
東院玉殿
15 6732Q
9 6139A
6732K
西大寺
Ⅴ
18 6133Db
20 6726D
楊梅宮
16 6235D
17 6732D
東大寺僧坊
S=1/6

図 2　奈良時代の軒瓦—2

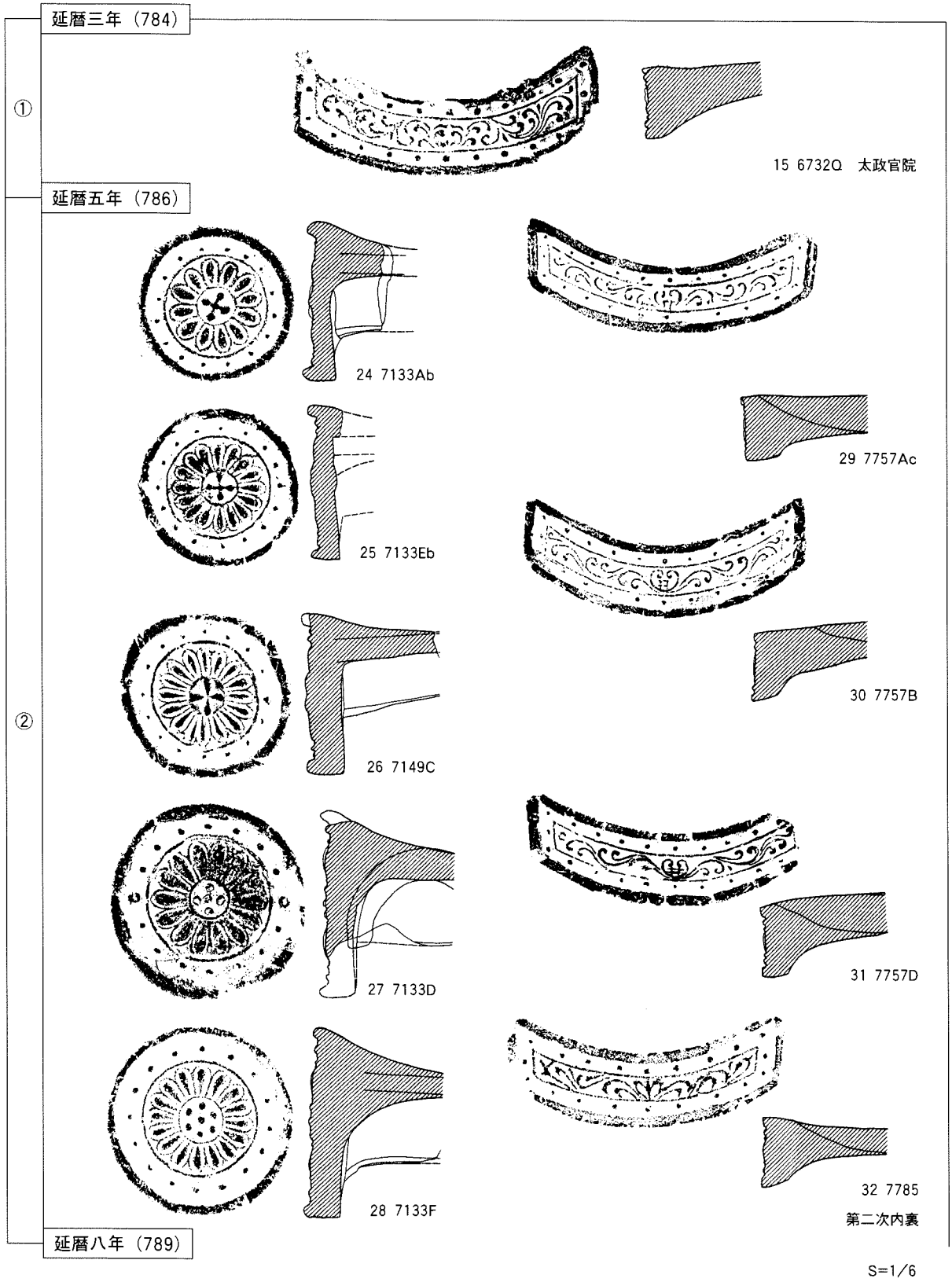

延暦三年（784）
①
15 6732Q 太政官院
延暦五年（786）
24 7133Ab
29 7757Ac
25 7133Eb
30 7757B
②
26 7149C
31 7757D
27 7133D
32 7785
第二次内裏
28 7133F
延暦八年（789）
S=1/6

図3　長岡京期の軒瓦—1

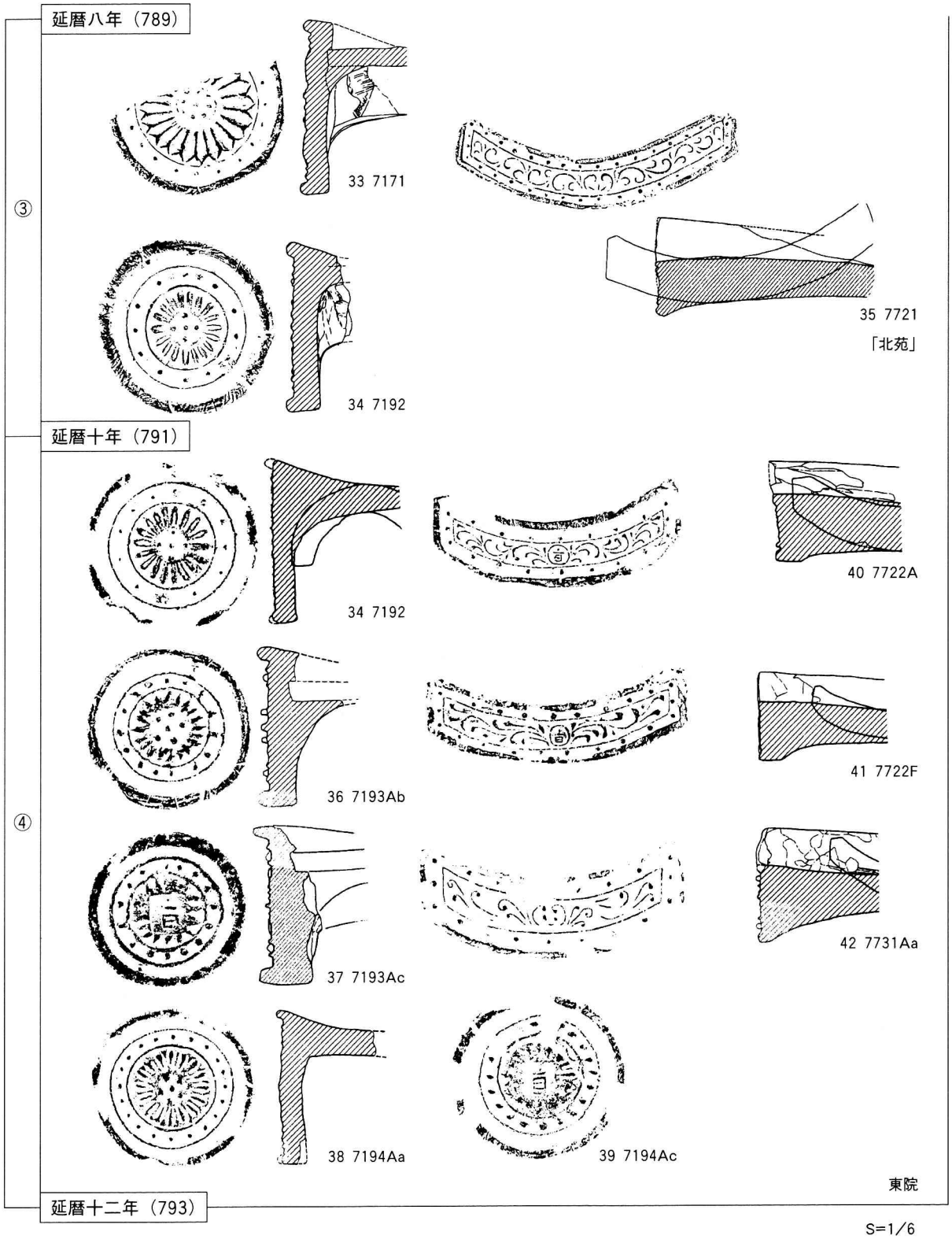

延暦八年（789）
③
33 7171
35 7721
「北苑」
34 7192
延暦十年（791）
34 7192
40 7722A
④
36 7193Ab
41 7722F
37 7193Ac
42 7731Aa
38 7194Aa
39 7194Ac
東院
延暦十二年（793）
S=1/6

図 4　長岡京期の軒瓦―2

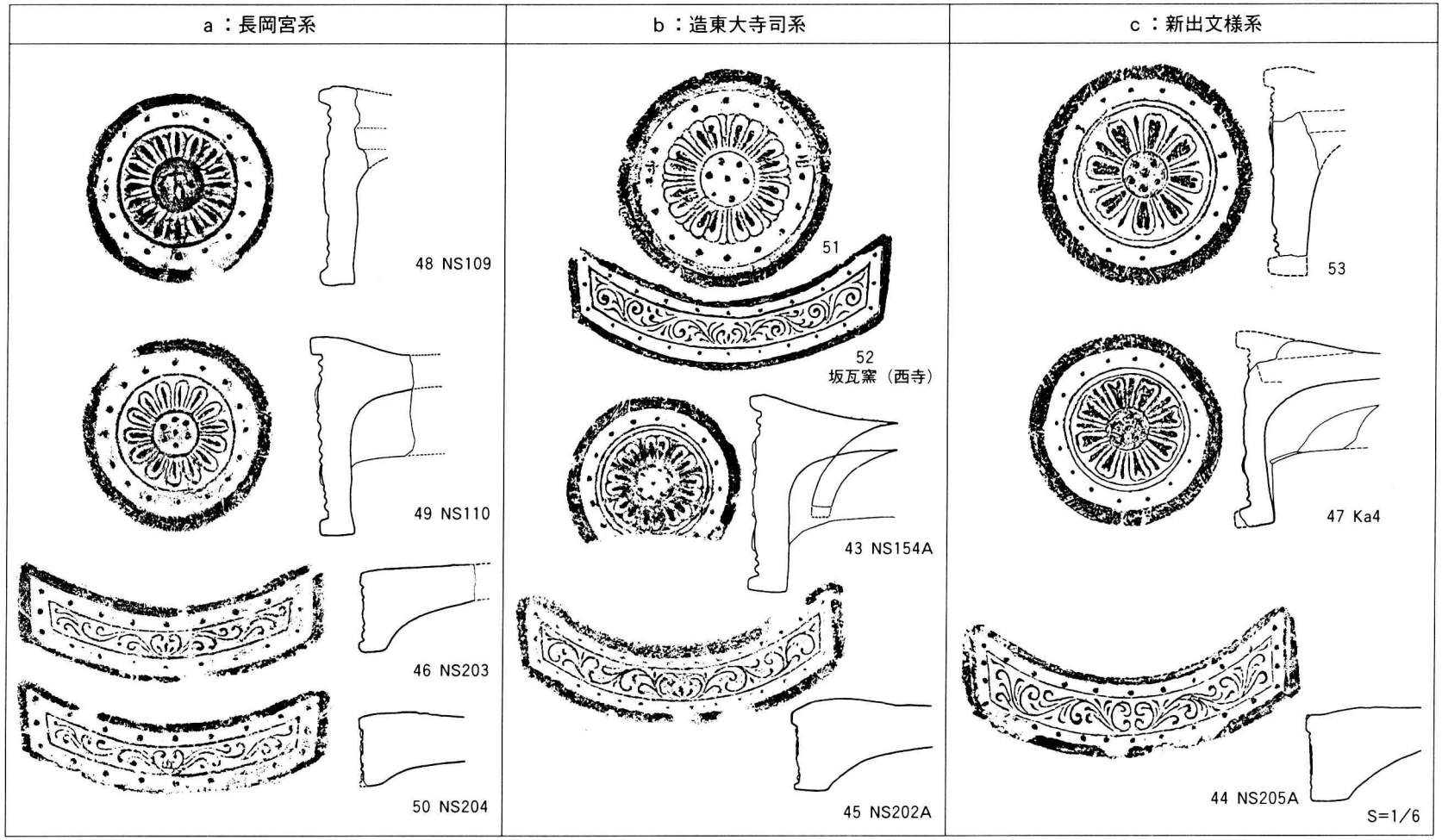
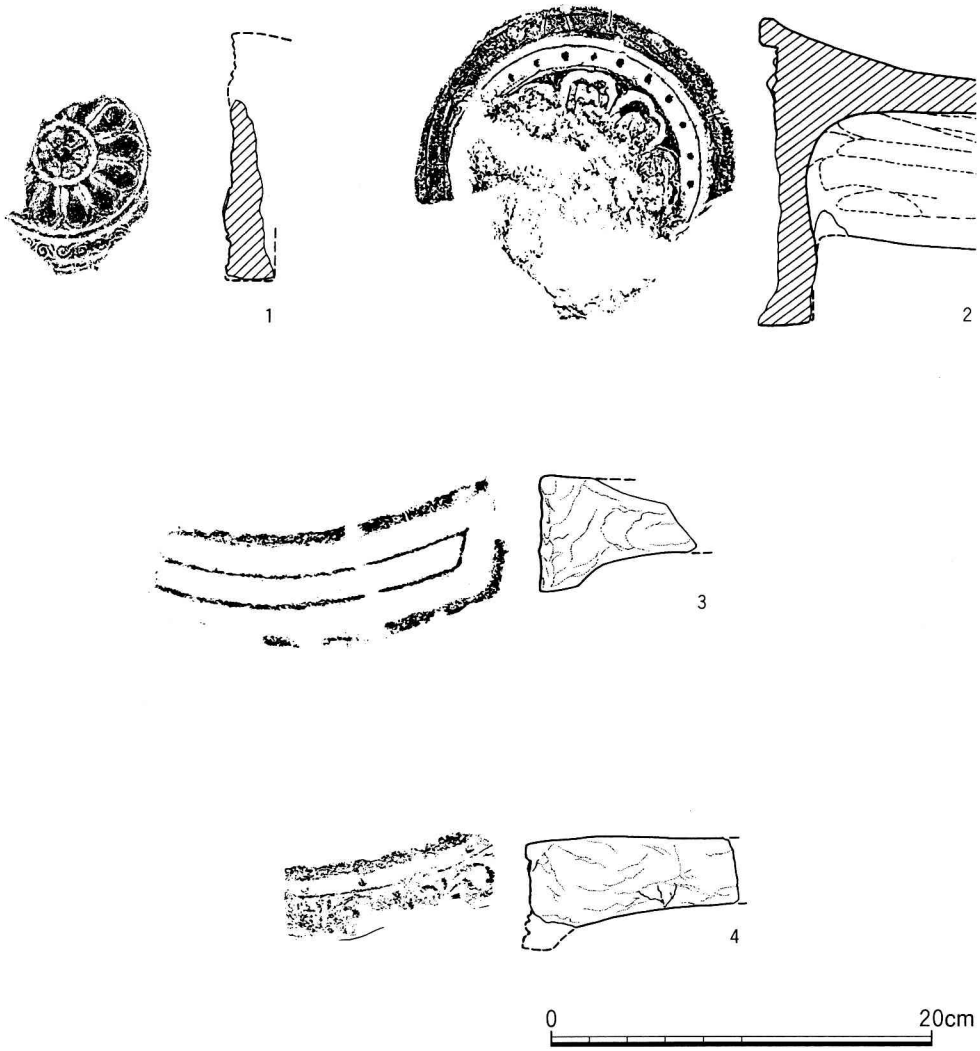
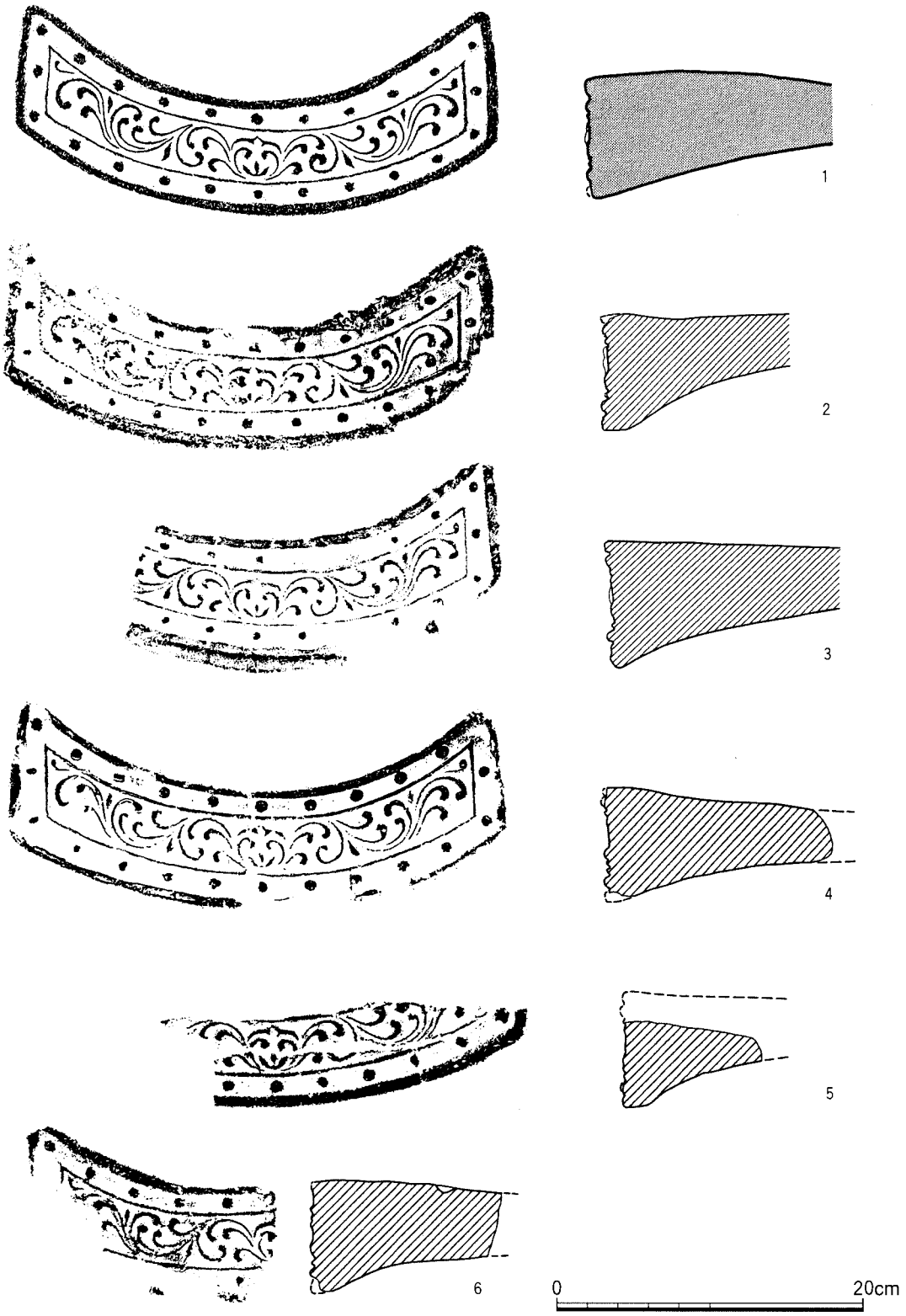


図5　平安時代初期の軒丸瓦



1　平城宮式7349型式　　2　平城宮式7234型式　　3　重画文　　4　長岡宮式7722型式D種

図 6　長岡京出土瓦



1　西大寺　　2　宮第116次　　3　宮第200次　　4～6　左京第300次

図7　軒平瓦6732型式Q種の顎形状

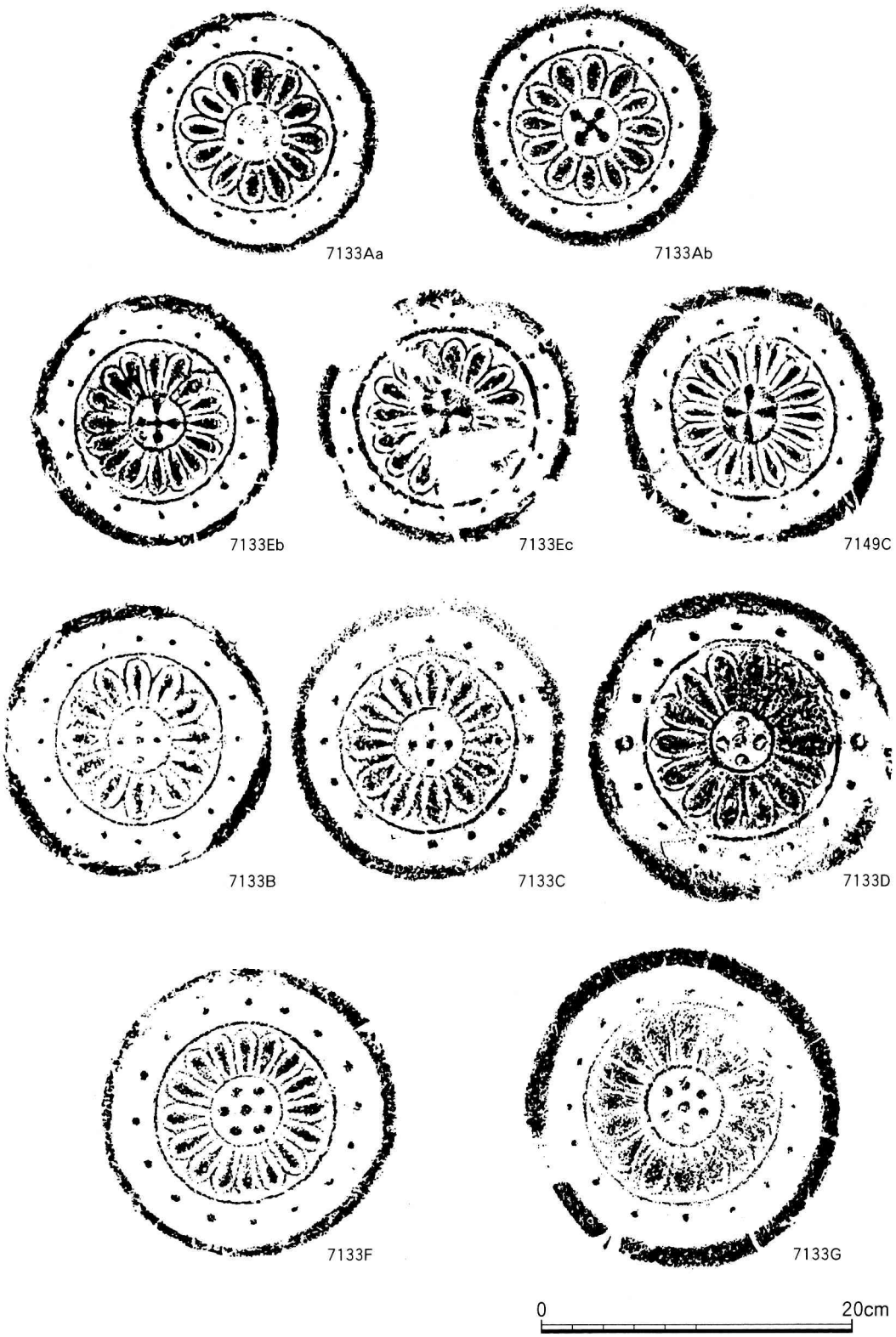


図 8　長岡宮式軒瓦―1(②軒丸瓦)

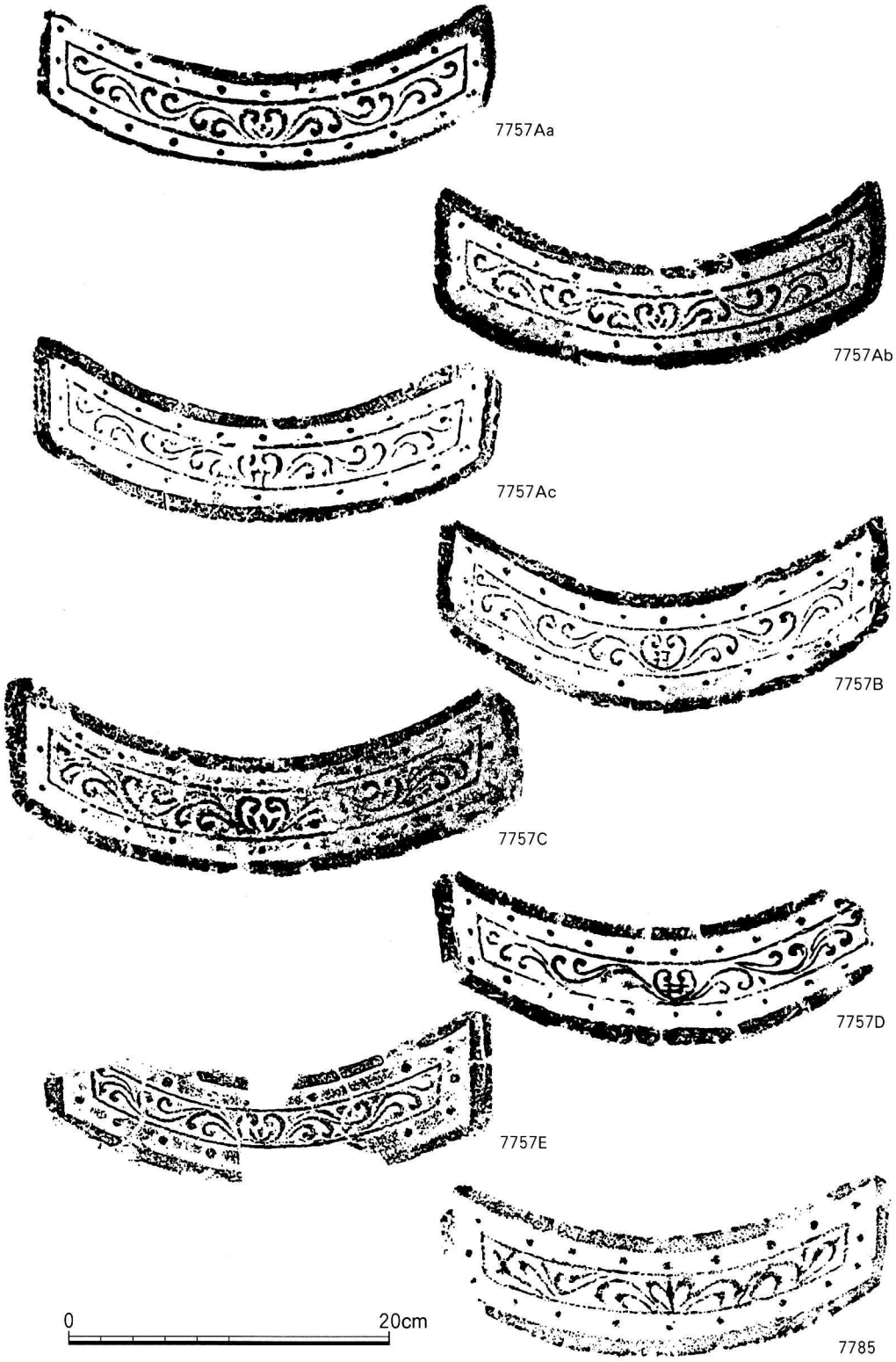


図9　長岡宮式軒瓦―2(②軒平瓦)

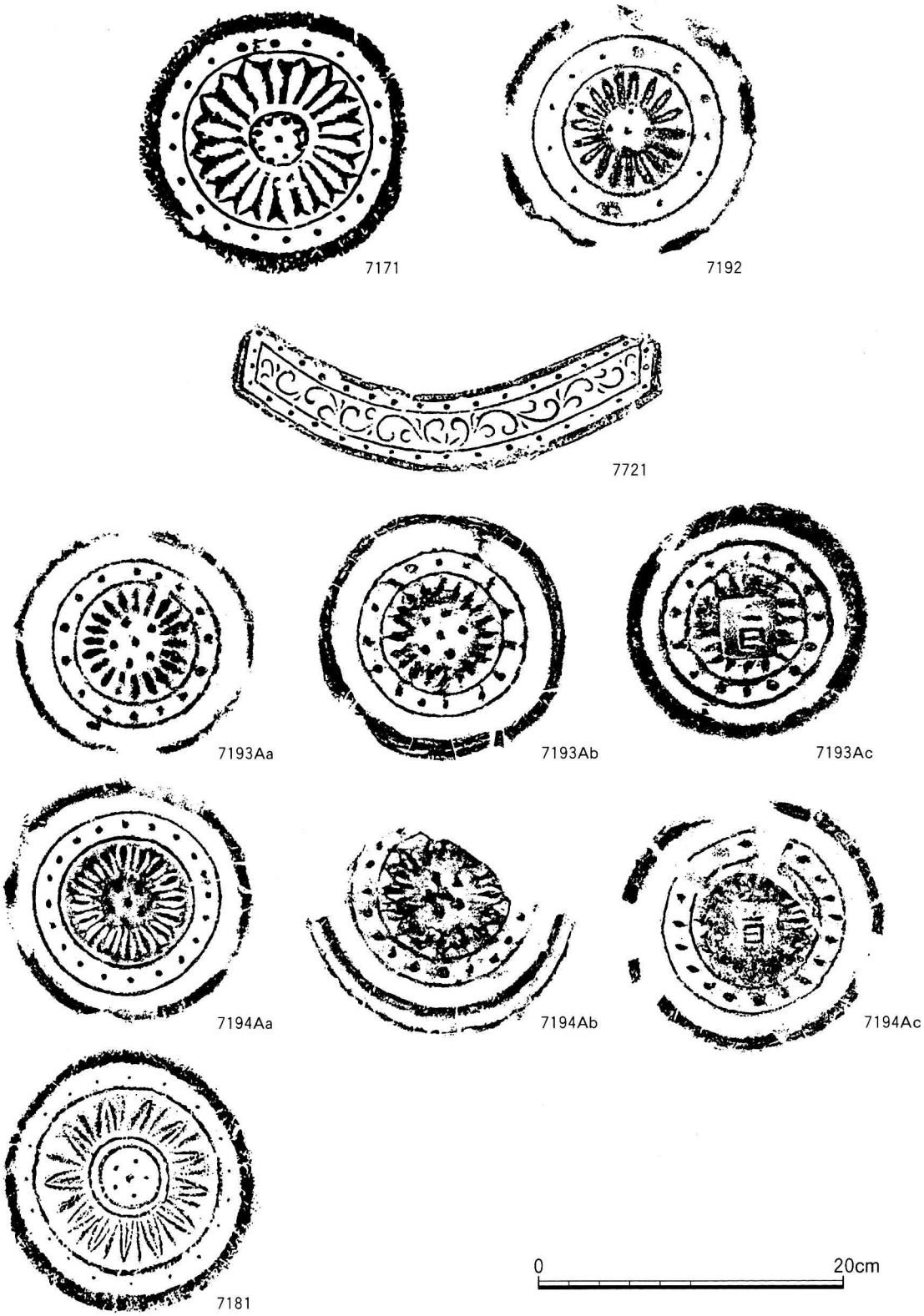


図10　長岡宮式軒瓦―3(③・④・⑤)

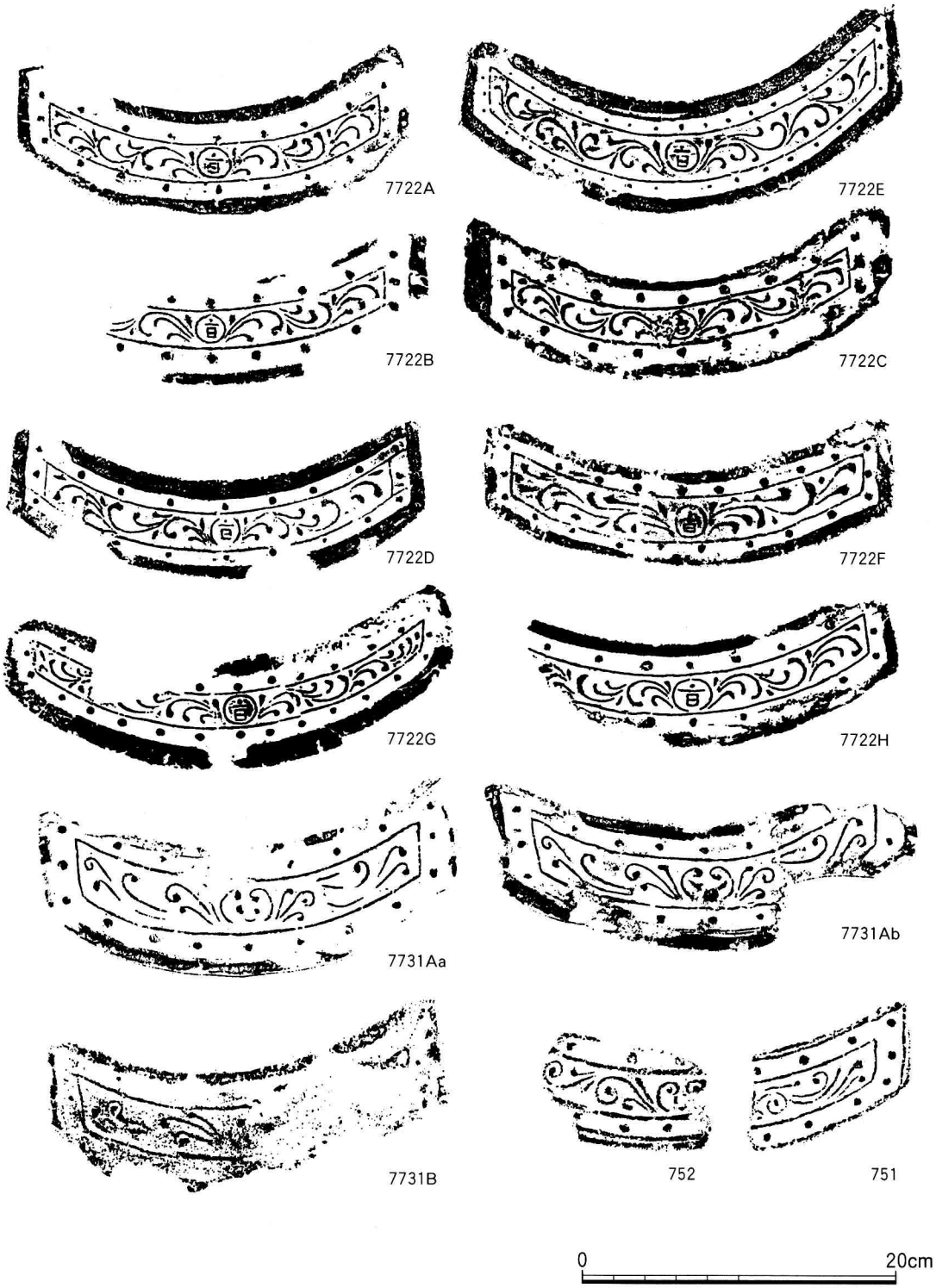


図11　長岡宮式軒瓦―4(④軒平瓦)

Bulletin of the National Museum of Japanese History
Vol. 134 March 2007

Tile Production during the Konin and Kammu Eras : A Study of the Nagaoka Palace Style of Roof Tile

NAKAJIMA Nobuchika

This paper surveys the designs and manufacturing techniques used for roof tiles used in capitals and temples built by the state during the Konin and Kammu eras spanning the end of the Nara period and the beginning of the Heian period. In particular, it examines the position of roof tiles made in the Nagaoka palace style. The two guilds of builders, those that built the palaces and those that built Todai-ji temple, which employed different designs and manufacturing techniques and existed during the second half of the Nara period, were reorganized and amalgamated during the period when the capital was shifted twice. Nearly all Nagaoka palace style tiles manufactured during this tumultuous time were made using the tile manufacturing techniques of the palace builders' guild, which also included those with poor designs.

By classifying Nagaoka palace style roof tiles according to design and distribution, it has been possible to date the time of manufacture of the different types of roof tile from the palaces and buildings that existed in the area where they were distributed as well as from era names and years recorded in documents.